

## 近代テクストに見られる日本の菓子文化に 関する小考 (2)

立川 和美

### 1. はじめに

本稿は、拙稿(2006)に続き、明治期の食文化の一部としての「菓子文化」について考察を行うものである。明治期は、その開国と共に西洋文化が流入し、日本文化が大きく変容した時代であった。それは文学や音楽・絵画といった芸術の領域のみならず、人々の生活の基盤である「衣食住」にまで深く及んだ。これらの中で特に食文化は、その比喩表現の発達から見て、他の二つに比べて「基本の基本」であり<sup>(1)</sup>、人々の生活に深く入り込んだ性格を持つと規定できる。よって、文学作品における当時の人々の生活描写において、様々な効果をねらって直接的かつ積極的な形で食に関する表現が取り入れられていたことが予想される。

ところで、「菓子」とは本来、朝、昼、夕の三回の食事以外の、いわゆる「間食」の際に「楽しむ」ものであるという点で、文化的な性格が強い。また言語学的見地に立ってみると、朝昼夕の食事については「-めし」「-食」「-ごはん」など合成語のバリエーションが豊富であるのに対して、間食は「間食」「おやつ」「お三時」といった固定した表現しか見られない。こういった点から「菓子」が食文化の一端を担いながらも、単に生命や健康の維持という目的で摂られる他の食事とは明らかに異質であることが分かる。

拙稿(2006)では、日本における菓子文化の流れを概観した上で、明治期の近代化に伴う菓子文化の変容について、1867年(慶應3年)という正に明治の幕明けと共に生まれた4人の作家(斎藤緑雨・幸田露伴・夏目漱石・正岡子規)の作品に登場する菓子を通して考察した。まず、古来の和菓子である「ちまき」や「かしわ餅」などは、それらが持つ歴史的背景及び日本人特有の季節感、そしてそこから派生した登場人物の「粹」な人物特徴などと密接に関係した形で用いられていた。一方、外国から渡来したばかりの西洋菓子(例 シュークリーム、チョコレート)には、特権階級のみが口にできるという特性を生かした文脈で登場するといった顕著な特徴が見られた。そこで本稿では、

明治期の食文化が外国文化の流入によってどのような特徴を持つに至ったかを、菓子という側面から更に詳細に捉えるため、既に日本に渡来して300年以上の歴史を持つ南蛮菓子と、その当時外国から渡来したばかりの洋菓子とに注目し、比較を行っていききたい。具体的には、これらが文学テキストでどういった形で取り入れられているかを観察することによって、明治期の日本の菓子文化のありようを考察したいと思う。

以下、拙稿(2006)でもコーパスとして用いた『明治文学全集』を用い、その中で用例が多かった以下の4種類、南蛮菓子としての「カステラ」(7例)と「ビスケット」(10例)、洋菓子としての「アイスクリーム」(8例)と「チョコレート」(11例)を取りあげる<sup>(2)</sup>。

ここで、今回のデータとしてとりあげる南蛮菓子と洋菓子との近年の需要を簡単に比べておきたい。1997年の時点で1世帯当たりの年間支出は、アイスクリームが8337円と突出しており、次いでチョコレート3519円、ビスケット3340円で、カステラは1146円と少ない、但しチョコレートに関しては、フランスやベルギーなどヨーロッパの専門店が2000年以降都内に続々とオープンしたこともあり、現在では更に高くなっていることが予想される<sup>(3)</sup>。更にチョコレートとアイスクリームは、1980年と比べて伸び率が大きいことも分かる。またビスケットは、消費支出は伸びてはいるが生産量はやや減っている(1970年245千t、1997年227千t)ため、高級化に伴う単価の上昇が考えられ、消費そのものは微減している可能性も考えられる。

#### 菓子の消費支出の推移(単位:円)

年 \ 菓子	カステラ	ビスケット	チョコレート	アイスクリーム
1980	1745	2882	2331	6001
1997	1146	3340	3519	8337

(財)食品産業センター(1998)『平成10年度食品産業統計年報』

近年はスナック菓子の消費も増加し、饅頭や羊羹といった和菓子も無視できないが、南蛮菓子に比べると洋菓子はかなり高い比率で消費されている事実は明らかであり、多様な様相を見せる現代の菓子文化の中で、洋菓子はやはり大きな位置を占めていると見ることができよう。

## 2. 明治期文学テキストにおける南蛮菓子の用例

### 2. 1. 南蛮菓子の渡来

日本の菓子文化の歴史において最初に西洋諸国から流入したのは、「南蛮菓子」である。日本が戦国時代にあった1543年に、ポルトガル人の手によって種子島に鉄砲が伝来

し、それと共にキリスト教や南蛮菓子も渡来した。具体的には「カステラ」「コンペイトウ」「ビスカウト」「タルタ」「アルハイ(トウ)」「ポーロ」などである。これらの中で、お茶席や祝いの菓子として広まっている「アルヘイトウ」や、四国の松山の銘菓となっている「一六タルト」などは、現代では一般に和菓子と見なされるようになっている。また、「カステラ」や「ビスケット」などは今も和菓子とは認めがたいが、日本人の日常生活の中で手軽な菓子として親しまれている。これらはいずれも伝来当時にはかなり高価であった砂糖をふんだんに用いたものであったため、基本的には貴族や大名など上流階級の食べ物とされていた。しかし明治期に入る頃には、一般の庶民が楽しむことのできる菓子に変化していったと考えてよいだろう。江後・吉川(1997)によると、「かすていら」は『馬琴日記』に5例見られる他、『関口日記』にも用例がみられることから、庶民の菓子としての浸透の深さがうかがえる。<sup>(4)</sup>

## 2. 2. 文学テキストに出現する「カステラ」

カステラは、和洋折衷の菓子とか和菓子として位置づけられることが多いが、南蛮貿易において輸入された菓子であることはまちがいない。スペインのカステイーリャ地方を原産とするこの焼き菓子は、南蛮菓子の中でも愛好され、長崎カステラは現在も長崎地方の銘菓とされている。石川編(1999)ではこの他、神奈川県「カステラ」、沖縄県の「黒糖かすてら」を土地の銘菓と挙げている他、関東地方独特の柔らかい食感を持つ上野風月堂の「東京カステラ」なども有名である。

このように、年齢や地域を問わず好まれている「かすてら」であるが、明治期のテキストではどういった菓子として取りあげられているのかを、以下、観察したい。

まず、三遊亭圓朝の落語『英国孝子之傳』に見られる例である。この作品の内題は「西洋人情話英国孝子ジョージスミス之傳」とあり翻案物とされているが、原典は不明で、作品の舞台は当時の文明開化に湧く東京である。明治18年(1885)年、圓朝が47才のときの作品である。<sup>(5)</sup>

丈「コレヨ、茶と菓子を持つて来いヨ。かすてらがよいヨ。コレコレ、何か此方(このかた)が内々の用談が存てお出(いで)に成たのだから、皆(みんな)な彼方(あつち)へ往て、此方(こつち)へ来ないやうにするがいい。お連れがあるやうですね。」

(明治18年『英国孝子之傳 第七編』三遊亭圓朝)

ここは主人公の重二郎が、恋人の父親であり敵でもある春美丈輔を訪問する場面で、主の春美が客に出す茶菓として「かすてら」がよいと言っているのである。「落語」という人々が耳で楽しむ音声言語のテキスト(ディスコース)において出てくる用例であることから、「カステラ」が一般民衆の知る菓子であったことが裏付けられる。

次は、田山花袋の『東京の三十年』(大正6)の冒頭の用例である。

三越はまだ越後屋と言つて、大きな折れ曲がつた店に黒い中に白く抜いた字の暖簾が長くかかつてゐて、中から、番頭や小僧の『おー、おー』と言ふやうな一種諧調のある呼声が聞えた。(中略)須田町の突當りは、楊柳などの氾氾(さんさん)として廣い火除地で、例の昔の錦絵にある東京新名所の石造の眼鏡橋が架つてゐた。

『お天保、一枚にまけーてあげます』

餅か、それともカステラのやうなものか、それは忘れたが、元気の好い江戸式のはっぴ股引の男がかう言つて触れて歩くと、大通の店から子供や娘や上さん達が争つて出てそれを買つた。その天保銭一枚の餅は非常に売れた。

(大正6年『東京の三十年 その時分』田山花袋)

これは明治初年頃の東京市街の様子である。東京はまだ「泥濘の都会」で「西洋造りの大きな家屋」もほとんどなく、街灯は石油式であり、「娘は島田髷に鹿子しぼり、赤い前懸などをして歩い」ていた頃である。ここで「餅」か「カステラのやうなもの」が争つて買われたという描写があり、天保銭(一銭に二厘足りない)という安価でしかも西洋的な香りのする菓子が、庶民の間で人気があったことが分かる。

同じ頃の作品と見られる正岡子規の短歌『竹乃里歌』(明治15-35)に収められた歌は、客人である原千代子と共に「かすてら」を食べて話をするという、お茶菓子としての「かすてら」が見られる。

原千代子きのふ来りてくさぐさの話ききたりかすてら喰ひつつ

(明治15-35年『竹乃里歌』正岡子規)

やや時代が下った作品である巖谷小波の『五月鯉』(明治21)では、某省書記官の畑山毅の娘である仙子と錦子姉妹が、友達のやはり「議官の姫君(令嬢)」である「春」の家に遊びに行った時の帰り際の部分で「カステラ」が登場する。

暫らく双方ですねたりいやみを云たりして居たがやがて是も多数決でとうとう二人ハ帰ることに極まつたそこで二人は先刻もらつたカステラを覚束ない手付きで紙につつんでしまい働きぶりに取りちらけてある茶碗を片づけやうとする、立つ時に水をにごさぬさすがはお嬢様

「そうしてお置き遊バセよくつてヨ

「それじやお春さん又…

「又キツト入らつしゃいヨ

(明治21年『五月鯉 第七 邂逅(めぐりあひ)』巖谷小波)

これは春の家で、二人の若くて可愛らしい客に対して出された菓子がカステラであり、二人はそれをその場で食べることはなく、包んで持ち帰っているのである。

北田薄氷『食辛棒』(明治30)は、「少女お伽噺」と表題の下に注記がある児童小説で、食いしん坊の姉(お鶴)が妹(お亀)のおやつを横取りしようとし、最後には罰があたって頭を柱にぶつけてしまうというユーモラスなストーリーの作品である。

今日(けふ)も学校が退校(ひけ)ての暇途(かへりみち)、お鶴はお亀と連立って歩きながら、又しても胸に浮べて居りますは、例のお菓子の事。母様が今日は何を下さるだらうか。ええと、昨日(きのふ)がカステラと金平糖(こんぺいとう)であつたから、今日は何だらう、ワツプルでもあらうか。それともお饅頭(まんぢう)か知らん。

(明治30年 北田薄氷 『食辛棒』北田薄氷)

これはお鶴が今日のおやつのことをあれこれと考える部分で、「かすてら」が金平糖やワツプル、お饅頭と並ぶ平均的な子供のおやつとして普及していたことが推察される。

最後に北原白秋の『思ひ出』の中の「カステラ」という詩をとりあげたい。これは明治44年の作品だが、かすてらが持つ甘さ、そしてほろほろとくずれやすい食感に作者の感傷的な気持ちがこめられている。

#### カステラ

カステラの縁(ふち)の渋さよな、  
褐色(かばいろ)の渋さよな、  
粉(こな)のこぼれが眼について、  
ほろほろと泣かるる。  
まあ、何とせう、  
赤い夕日に、うしろ向いて  
ひとり植ゑた石竹。

(明治44年 『思ひ出』北原白秋)

以上、カステラについて見てきたが、基本的には茶菓としてお客様をもてなす際に出される菓子としてポピュラーであった他、子供のおやつとしても愛好され、音声言語テキストでの用例もあることから、かなり一般的に馴染みの深い菓子として認められていたことが分かる。<sup>(6)</sup>

### 2. 3. 文学テキストに出現する「ビスケット」

ビスケットは、南蛮貿易の際「ビスコウト」と呼ばれて、長崎で盛んに作られるようになった菓子である。卵やバターをふんだんに用い、その栄養価の高さから日清戦争では兵糧として用いられていた。まず、それに関連する用例として、国木田独歩の『想出るまま』(明治28)を挙げる。この海軍赴任中の記録(紀行文)では、ビスケットが海軍の食事の一部として用いられていたことが記されている。

大連湾に碇泊中(ていはくちう)、或日所用(しよよう)ありて艦長室(かんちやうしつ)に入りけるに、此れは又た何事ぞ、二人の支那人(しなじん)、敷物の上にあぐらかき、前(まへ)に小机(こづくえ)を置いて、其上(そのうへ)には食用(しよくよう) ビスケット及び白砂糖置かれたり。(中略)

吾等が僅(わづ)かに一個を食(くら)ひ得る程(ほど)のビスケット、二人は各々(をのをの)三個(さんこ)計(ばか)り忽ちに食(しよく)し了(お)はりて平然(へいぜん)と立(た)ち去(さ)りぬ。

(明治28年『想出るまま(四)頓首三度』国木田独歩)

ビスケットについては、その栄養価の高さから、正岡子規が病床でよく食べていたという記録(拙稿2006)の他、志賀重昂は『日本風景論』(明治27)で次のように叙述している。

餅、ビスケット

山中には泉水、溪水なき所あるを以て餅若くはビスケットを携帯すべし。餅はビスケットより面積小に且つ胃を充たすも亦た少許にて足れりと雖も、ビスケットより滋養少し

(明治27年『日本風景論』志賀重昂)

この作品は、思想的色彩の強い政教社から出版されたが、日本風土を通した志賀の人間観や文化観、芸術観は、広く読者に受け入れられた。ここでは「登山」の効用を示した上で登山の準備にあたっての「食」について、「米」「肉膏(ベムミカン)」などと共に挙げられた項目で、ビスケットが高い栄養価を持つ食品として認められていたことを表している。

こういった実用的な効用を強く示す用例の一方、ビスケットが当時一般にはどういう菓子と認められていたのか、次にそのイメージをよく表す例を観察していきたい。柳川春葉『錦木』(明治34)では、大富豪だが病弱で孤独な「保則」のもとへ、その不和を

わびにやってきたいとこの「お邦」とのやりとりが描写される場面で、この菓子が登場する。保則がお邦への茶菓を下女に所望するにあたって、下女が「ビスケット」を提案しているが、保則は「妙で無い」として、お邦が持参した手みやげである彼の好物の栗饅頭を持って来るように指示する。つまり、ビスケット自体についてはカステラに見られた「お客様向け」の菓子という位置づけはかなり薄いことが分かり、保則もお客への茶菓としては不適切だと判断しているのであろう。

保則は座敷うちを片付けてゐる下女を呼んで  
『何か菓子があつたらうから持つて来てくれ』  
『ハイ彼(あ)のビスケットが宣敷(よろし)うございますか。』  
『然(さ)うさな……ビスケットも妙(めう)で無い。丁度(ちやうど)今頂戴したのを明(あ)けて来てくれ。』

(明治34年『錦木 十三 詫事』柳川春葉)

小杉天外『はやり唄』(明治35)では、北関東の地主の妻である雪江が、妹の病気や夫との不和といった自分の目の前の現実を逃避して、自分自身の美しさに満足しながらくつろぐシーンに見られる。ここで下女に、ワインと共に持って来させるのがビスケットである。

「奥様、ただ今お医師(いしや)様がお来(い)でになりました。」  
と云ひながら傍(そば)へ進寄(すすみよ)つたのは、葡萄酒(ぶどうしゆ)の瓶(びん)と、コップと、ビスケットを盛つた皿を運んで来た仲働女(なかはたらき)の竹である。

(明治35年『はやり唄 第十三』小杉天外)

春葉と天外は、明治34年、35年とほぼ同時期に発表された作品なのであるが、この両者に共通していることは、上流階級の家には常備される菓子としての位置づけ、そしてそこからビスケットがあるということがそういった階級の証明とされ、独特の香りを醸し出す道具とされること、及びこの菓子がお客様向けではなく自宅使いのものと認められているということである。

これが更に顕著に現れている例として、内田魯庵の『くれの廿八日』がある。内田魯庵はドストエフスキーの『罪と罰』(明治25)を翻訳するにあたってビスケットを用いているが、小説『くれの廿八日』(明治31)では、金満家の旦那である純之助が飼い犬にやる菓子としてビスケットを登場させている。

(純之助ガ) 二番鶏が啼くとまもなく、薄暗い中(うち)から雨戸を勢ひよくガラガラ開け、珍らしく最愛のブルドッグを伴(つ)れて朝寒(あささむ)を侵(おか)して散歩に出掛け、帰ると(中略)珍らしく庭下駄を引摺つて離室(はなれ)の縁(ゑん)からツイ四五勺離れた鍾乳石の傍(そば)でブルドッグを擲揄(からか)ひながら乾蒸餅(ビスケット)を与つた。

(明治31年 『くれの廿八日 其一』 内田魯庵)

「金満家」という「資産家」よりもあからさまな表現を用いている点からも、彼にとっては日常普通に口にするととりたてるほどのない菓子として、ビスケットが存在していたのである。

以上、南蛮菓子としてのカステラとビスケットを見てきたが、両者はおおよ次のように捉えることができる。

まず、両者の共通点として、共に茶菓といった飲み物に付随した位置づけを与えられているという特徴がある。各々の特徴として、まずカステラは、お客様への菓子として用いられる他、婦女子、時に上流階級の上品なお嬢様の楽しむものから、子供達のおやつとしてまで幅広く用いられているが、そこにはある程度の「特別感」というニュアンスも存在している。また、それと共に誰もが一度は口にすることがあるという一般性から、詩のモチーフとしても使われ、そこでは甘くて柔らかく、くずれやすいといった温かみのある感傷的なイメージの喚起を可能にする菓子と捉えられている。

ビスケットはカステラに比べて手軽な菓子と見られ、特にその栄養価の高さや保存食としての価値から、兵糧や病中の食事、登山食などとして用いられていた。また、特に富裕層においては、お客様をもてなす菓子という意味合いは薄く、常備しておいて自身自身のちょっとしたお茶の時間やお酒のつまみとして楽しむといった、かなり親しみのある現代での用いられ方に近い菓子として定着していたと考えてよいだろう。

### 3. 明治期文学テキストにおける西洋菓子の用例

#### 3. 1. 西洋菓子の流入

拙稿(2006)でも述べた通り、江戸末期の開国に伴って、アメリカやロシア、イギリス、オランダ、フランスといった欧米の文化が流入し、日本の食文化は変化を遂げた。菓子文化は、貿易港とされる横浜や神戸などを拠点に大きく発展し、初めは専ら外国人を対象として作られた西洋菓子も、多くの職人が育つことで日本人も親しむものとなっていった。



### 3. 2. 文学テキストに出現する「アイスクリーム」

村山（2001）によると、アイスクリームが日本で初めて製造販売されたのは、1865年アメリカ人のリズレーが横浜でアイスクリームサルーンを開業したことに始まる。その後、1869年には、やはり横浜の馬車道で町田房造が日本人として初めてアイスクリームを製造販売した。

拙稿（2006）では、斎藤緑雨における批評の文章『おぼえ帳』（明治34）における「氷菓子」と「高利貸し」との同音異義語を用いた例や、夏目漱石の裕福な少年が毎年夏に一番に食べる菓子としての例（『それから』明治42）を挙げた。ここではそれ以外の例を見てみたい。

まず、モース『日本その日その日』（明治10）では、東京帝国大学の外国人教授達が上野公園の教育博物館に招かれたときのことが記されている。

この接待宴には、教員数名の夫人達を勘定に入れて、お客様が百人近くいた。いろいろな広間を廻って歩いた後、大きな部屋へ導かれると、そこにはピラミッド型のアイスクリーム、菓子、サンドウィッチ、果実その他の食品のご馳走があり、芽が出てから枯れる迄を通じて如何に植物を取扱うかを知っている、世界唯一の国民の手で飾られた花が沢山置いてあった。これは実に、我が国一流の宴会請負人がやったとしても、賞賛に値するもので、この整頓した教育博物館で、手の込んだ昼飯その他の支度を見たとき、我々は面喰らって立ちすくみ、「これが日本か？」と自ら問うのであった。

（明治10年『日本その日その日 九 大学の仕事』モース）

ここには外国人教員に向けて饗された食事の中に立派なアイスクリームがあり、筆者は日本人の手によって用意された菓자에驚嘆していることが分かる。

明治19年という比較的早い時期に書かれた饗庭篁村『人の噂』は、読売新聞に23回にわたって連載された短編であるが、漢字にルビ付きで「あいすくりむ」と表記されて登場する。

八十九十まで生たりとて夫（それ）で沢山と云れぬが命、錦の帳（とぼり）の中（うち）に侍（かし）づかれて氷菓子（あいすくりむ）を末期（まつご）のみずにしても満足の出来ぬハ死なり然を況（いは）んや生温（なまぬる）い川水にゆられ流れて退汐（ひきしほ）の塵と共に蟹の出入（ではいり）する崩れた石垣の傍ら（そば）へ置いて行かれて誰（たれ）頼ぬに土左右衛門と名を改めて呉れるハ死んだ後だから如何（どう）でも宜いとハ云はれぬ形なり（後略）

（明治19年『人の噂 第二十回』饗庭篁村）

擬古典派の江戸八文字屋本の非常に古いリズムを取り入れた文体の中に「氷菓子（あيسくりむ）」が登場しているのは、非常に興味深い。この新と旧とをあえて組み合わせるところに筆者のねらいがあったと思われるが、すでにこの菓子の名を読者は知っていたという前提で用いられた例と考えられる。

次に、かなり時代が下った、田山花袋『第二軍従征日記』（明治38）の例を見てみたい。これは、花袋が博文館から派遣された従軍記者として写真班に属し、明治37年に遼東半島に赴いた時の紀行文であるが、遼河の畔にやってきて、久しぶりに食べた西洋料理に感激するシーンでアイスクリームが登場する。

七月三十日（土曜日）晴（中略）

物珍らしさに、炎暑をも恐れて、自分等は彼方此方（かなたこなた）と写真機械を運び歩いたが、日の暮れる頃、遼河（れうが）の河畔なるマンヂユリアスハウスと言ふ旗亭（ホテル）に行つて、久し振りで旨い西洋料理を食ふことにした。（中略）

これも理（ことわり）ではないか。自分等は宇品（うじな）を發（た）つて以来、四ヶ月と言ふものは、福神漬（ふくじんづけ）に牛灌、飯はいつも半熟の拙（まづ）いもの、酒と言つては臭い支那焼酒（せうちう）か、甘く酸い黄酒（ツタンチユー）ばかり、日本の清酒すら一月に一度位しか飲めぬ身であるのに、このカツレット、このビフテーキ、このコロツケー、ことにこの泡立てる麦酒。

最後のアイスクリームがまた喝采（やんや）の声を發（あ）げさせたので、湯水をさへ完全に飲めぬ身の、今自分氷があつたらナア、ラムネがあつたらナア、いや、アイスクリームが有つたら何（ど）うだ。一圓でも好（い）い、いや五圓でも好（い）いなどと、とても望めぬ事を徒らに分け日筒あつたのであるが、それが今ここに、その薄白い鶏卵色のアイスクリームが今この卓の上に。

『素敵、素敵だナア』

と歓呼したのものがあつた。

（明治38年『第二軍従征日記』田山花袋）

彼らが飲んでいる「麦酒（ビール）」の「紙標（ペーパー）」には「獨逸（ドイツ）ミュンヘン」の製造と表記してあり、「卓（テーブル）」には「白いリンネル」が敷かれている。この食事の後、「旗亭（ホテル）」のバルコンに出て美しい夕暮れの景色を楽しむと文章は続き、いかにも西洋風を強調した文脈であることが分かる。

続いて、これと同じ頃の作品で女性作家の手によるものを見てみたい。与謝野晶子『毒草』（明治37）の中の散文「七日がたり」は、鎌倉にある「この春できし伊南村ホテル」を舞台とし、伯爵夫人や博士といった若い上流階級の男女を登場人物とする短編だ

が、「厨夫の運びしアイス・クリームは洩れなく人々の前にゆきわたりぬ」という表現が見える。

森しげ『あだ花』は、彼女の最初の結婚(2度目は森鷗外)からのエピソードを綴ったものだが、筆者自身がそうであった器量自慢の「富子」を主人公とした作品で、フランス帰りの叔父(富子の父の弟)と共に麴町の杉本伯爵の園遊会に出掛ける場面で、アイスクリームが登場する。この作品中で、富子は「紫に派手なもよりの振り袖に緋錦の帯を締めて」いる。

食堂が開かれた。富子が肉食の出来ないのを知つてゐるおぢさんは、水菓子だのアイスクリームだの富子の食べられる物ばかり運んで来てくれた。隣りにゐた松野さんはそれをみて云つた。

「洋食がお嫌だつて。見掛に寄らない物ね。」

「わたしそんなに洋食が好きさうに見えて。」

「そりや白髪でも生えてゐなければ吊り合はないわ。」

おぢさんが後ろから一寸肩を叩いたので、富子は振り返つた。

「余り寒くならに内に帰らうね。」

おぢさんは富子を家まで送つて来てくれた。

(明治45年『あだ花』森しげ)

華やかなパーティーの場面で、主に女性が食べる上品な菓子としてアイスクリームが取りあげられているのである。

こういったアイスクリームも、大正に入る頃にはかなり広く親しまれるようになる。後藤末雄『素顔』(大正2)は、初夏(五月)の日射しの中での様子が描写されている。

表通りでは柳の樹(こ)かげにパラソルと夏帽子が行きあつた。乗換(のりかへ)の停車場では扇を使ふ姿が見えて、もうアイスクリームの売声が聞えるくらゐ。向ふ門の大時計に焦げるやうな日影がさして、今しも太い鐵針が重ならうとしてゐた。

(大正2年『素顔七』後藤末雄)

文章から分かるように、「夏帽子」「パラソル」「停車場」などのハイカラな様子を配した下町の情景には、充分に西洋文化が浸透した雰囲気が出ており、その中にアイスクリームの売り声も聞こえるのである。

### 3. 3. 文学テキストに出現する「チョコレート」

日本国内でチョコレートが広まるきっかけとなったのは、1873年に両国の米津風月堂

がその製造に着手したことに始まる。この頃から少しずつ人々の口にチョコレートが入るようになり、1918年に森永製菓がカカオ豆からのチョコレート製造を開始し、また1925年に明治製菓がミルクチョコレートという板チョコを製造したことで急速に普及した。同じ頃、神戸では、ロシア人のゴンチャロフやモロゾフらロシア革命を逃れた人々によって、本格的なチョコレートが作られた。こういった外国人菓子職人による菓子文化は、神戸を洋菓子の町へと発展させた。

さて、明治の文学作品に登場するチョコレートは、菓子としての固形の食べ物ではなく、すべて飲み物としてのチョコレートに限られている。

最も早い例は、黒岩涙香『片手美人』(明治23)という探偵小説で、「給仕の持来りしチョコレートを一息に呑乾て其儘代価を払ひ時計を見ながら此店を立去りたり」という叙述が見られる。

このチョコレートの用例は、明治32年以降に集中して出現している。徳田秋声『情けもの』(明治32)は、新政党の機関誌の主筆を務め秋声自身の性格を写したような薄志弱行の主人公(援山)が、実行型の友人(遊座)に新党の首領令嬢である恋人を譲ってしまうことから、自分も彼女も不幸になってしまうという設定の政治小説である。

△△縣知事遊座(ゆざ)修三が邸宅の食堂で丁度饗応が済んだあと、大い食卓を取囲んで、大方(おおかた)は顔を真紅(まつか)にして頹然(だらり)と椅子に凭(よ)りかかっているのは、遊座を始め其属僚の徒(ともがら)で、辯(しやべ)り儘(くたび)れた口に啣(くは)へたたばこの煙は懈(だる)さうに電気燈の光を濁(にご)してゐる。

仏蘭西焼(ふらんすやき)の珈琲(コーヒイ)茶碗に残つてゐた、チョコレートのさめたのを匙で引搔廻して、一口吸(すす)つた遊座は、後(うしろ)の緑色の綾倫子(あやりんず)の窓推(カアテン)を操つて窓を啓(あ)けると、冷たい風が心地よく流れ込んで、援檯(ストーブ)に暖(あたた)まつた空気と交替するのであつた。

「援山は到頭来をらんかつたね。」と遊座(ゆざ)は座に戻つて灰落(はひおとし)に置いてあつた、葉巻を啣(くは)えて、火の消々(きえぎえ)なのを、ちゆうちゆうと咄(しやぶ)つてゐる。

(明治32年『情けもの(五)』徳田秋声)

ここで、チョコレートは、食事を終えた後たばこを吸いながら男性が飲む飲み物として登場しており、現在のお菓子としての要素は見られない。

草村北星の家庭小説『濱子』(明治35)では、ヒロイン濱子の夫である日向輝男の家で男性三人が会食を行う場面にチョコレートが出てくる。

卓子(テーブル)を三角に取囲(とりかこ)んで、何(いづ)れも微燻(びくん)を帯びてゐる。これは日向男爵家(ひなただんしゃくけ)の西洋室(せいやうま)の会食室で、日向輝男(ひなたてるを)が主人(あるじ)となつて、客の二人といふのは、共に親しい交際を結んでゐる小菅静馬(こすがしづま)と、他は小山田清雄(をやまだきよを)といふ美術家なので。

寒山竹(かんざんちく)の大きい鉢植が、一方の卓子(テーブル)に置かれて、燃立つやうな緋(ひ)の窓掛が引絞(ひきしぼ)られたまま、夕日を受けて眩濯(まばゆ)いばかりである。物は大方荒らされて、乱暴に投出されたナイフが嚙未了(のみさし)たコップと共に、日の影にきらきらと輝いて天井(てんじやう)に反射した。

「ぢや、君、珈琲(コーヒー)にしやうか。君はチョコレートといふ注文だな。」と日向(ひなた)は美術家と小菅(こすが)とを見較(みくら)べて「何(ど)うだ、庭でも散歩して、改めて晚餐後(ばんさんご)の一杯といふのは。」

「それは甚(はなは)だ結構だね。僕正(ぼくまさ)に賛成する。」と卓(たく)を叩いたが、コップを取つてぐつとやつて「ああ咽喉(のど)が干(かわ)いて仕様がない、だから君たち(きみたち)の貴族主義は好(この)もしくないといふのだ。」

(明治35年『濱子 過去の事件』草村北星)

ここで小山田の「咽喉が干く」というのは、「三鞭(シヤンペン)」を飲まされたからだという叙述が続くのだが、日向は男爵家の嫡男であり、葉巻(シガア)を嗜む男で、こういった男性達がコーヒーかチョコレートを食後に飲むのである。

その他、漱石の例でも「誠太郎、チョコレートを飲むかい」(『それから』明治34年)と明らかに飲み物としてのチョコレートである「ショコラー・ショー(フランス語でホットチョコレート)」が登場する。現代でも、フランスではカフェで楽しむ冬の飲み物の定番であるが、これはいわゆるココアとは異なる飲み物である。ココアは、カカオの種子を煎って脂肪を除去したものに牛乳や水を加えた温かい飲み物であるが、ホットチョコレートは、カカオの種子を煎ってまると生かした濃厚なチョコレートを液体にしたものである。

さて、木下杢太郎の詩には、実に多くのチョコレートが登場する。その一部を以下の紹介したい。

・土のかをりの植古筆(ちよこれえと)

(『秋風抄』M40「植古筆」)

・予は寂しく、濃い植古筆(しょこらあ)の中のキスキイの匂いを嗅ぐ

(『異国情調』M43「邪宗僧侶刑罰図を眺むる女」)

・植古筆(チョコレート)の中へコニヤツクを入れてもらつて……

(『食後の唄』T8「檀古筆」)

このようにチョコレートは、菓子というよりは男性の楽しむ飲み物であり、文学作品の中では、そこに登場する人物に品格のある男性という印象を持たせるためのパーツとして機能しているのである。

以上、洋菓子としてのアイスクリームとチョコレートを見てきたが、およそ次のような傾向が見られる。

まず、アイスクリームとチョコレートの共通点は、飲み物の付属物ではなく、独立した食べ物、または食後のデザートと位置づけられていることが挙げられる。

アイスクリームは、明治初期には人々が一度位は口にしたことのある西洋菓子であり、極めて上流階級の人々が洋食のパーティーなどで食後のデザートとして食べるものであった。大正に入り、東京の下町にも西洋の文化が入ってきた頃、アイスクリーム売りも登場する。

チョコレートは、飲み物として主に上流階級の男性が食後に嗜むものであり、これは明治30年過ぎ頃からその用例が見られるようになる。現代の固形のチョコレートは、明治時代には一般にはまだ浸透していなかったと見てよいだろう。

#### 4. 文学テキストに見る渡来物の菓子文化

明治時代の文学には、国費留学を果たした森鷗外(ドイツ)や夏目漱石(イギリス)ら余裕派・高踏派と呼ばれる人々、また『あめりか物語』『ふらんす物語』などの作品でその体験を綴っている永井荷風のように、自然と西洋の食文化に触れていた作家が存在し、作品にもその影響は強く反映されていた。石毛(1999)では、「日本の近代文学が快楽を否定する傾向」にあったことから「日本文学というのは食欲不振の文学」であるといった指摘がされており、それに従うと、菓子という一種の「快楽」と密接に結びついている食品の描写はより制限される方向に動くことが予想されるが、実際には「菓子」というモチーフは、書き手にとって大きな効果を持つものと認識されていたふしがある。つまり、書き手にとって菓子は単なる食物としての提示にとどまらず、作品の中でそれ以上の何らかの象徴的イメージを持つ「手段」として生かされる道具や、何らかのメタファーとして機能することも可能な要素だったのである。これは、菓子文化が食文化の一部でありながらも、他の社会構造とリンクする部分を多く持った文化であるためであり、とりわけ外来の菓子(渡来物)ではその傾向が強い。

このように考えた上で、今回取りあげた菓子について、各作品の比較から分かる特徴をまとめておきたい。

## ①カステラ

作者	時代	やり取り(食べる人物)	用途	ジャンル
子規	M15-35	男→女	茶菓	短歌
圓朝	M18	男(富豪)→男	茶菓	落語
小波	M21	女→女	茶菓	小説
薄氷	M30	母→娘	おやつ	小説(児童)
銀蔵	M36	宣教師→民衆	布教の道具	社会史
白秋	M44	——	回想手段	詩
花袋	T 6	売り子→子供・娘等	商品	随筆

カステラは用途としては茶菓が中心であり、明治の初め頃は男性から男性へというやりとりも見られるが、中～後期にかけては、食べる対象が女性や子供へとしぼりこまれてきていることが分かる。

## ②ビスケット

作者	時代	やり取り(食べる人物)	用途	ジャンル
魯庵	M25	(店主)→少年	ビールのつまみ	翻訳
志賀	M27	作者(男)→男	登山の持ち物	評論
独歩	M28	男→男	報酬	随筆
魯庵	M31	男→犬	餌	小説
漱石	M34	女(若い・四十恰好)	列車内のおやつ	随想
子規	M34	家族→男(病人)	食事(間食)	日記
春葉	M34	男→女	茶菓	小説
天外	M35	下女→女	葡萄酒のつまみ	小説

ビスケットは極めて多岐のジャンルの作品に登場しており、ここからその菓子が人々に浸透していたことが伺われる。大きくは女性が食べる菓子と栄養食との二つの傾向に分けられるが、今回の分析では、女性が食べる菓子としての傾向は明治31-35年に出現が集中し、栄養食に関する出現はそれよりも少し早い。これは日清戦争が1894(明治27)年であることから、そこでまず菓子が持つ栄養価という実質的な側面に注目が集中し、やがてそれが一般のお菓子として広がっていた(特に茶菓や更に気軽な食べ物)と考えられる。

## ③アイスクリーム

作者	時代	食べる人物	用途	ジャンル
モース	M10	外国人	デザート	記録
篁村	M19	老人	末期の水	小説
緑雨	M30	女性	茶菓	アフォリズム
漱石	M34	裕福な少年	おやつ	小説
晶子	M37	男女(若くて裕福)		小説
花袋	M38	若い男	デザート	小説
しげ	M43	女	食事	小説
末雄	T 2	——	おやつ	小説

アイスクリームは、極めて洋風の文脈で登場してそれをより強調する他、古典的な文体に突如登場させることで、文章内容のアクセントやリズム、批評としての面白みを加えるなどの効果を出している。南蛮菓子のカステラやビスケットに比べると、アイスクリームの登場する場面は、パーティーやホテルのレストランなどに限定されることが多く、また女流作家の作品に多く登場することもこの菓子の持ち味を生かしているものといえよう。

## ④チョコレート

作者	時代	食べる人物	用途	ジャンル
涙香	M23	男	休憩時	小説
緑雨	M31	不明(老人)	菓	アフォリズム
秋声	M32	男	食後の飲み物	小説
北星	M35	男	食後の飲み物	小説
漱石	M42	男(少年)	おやつ	小説
李太郎	T 8 他	男	酒と共に	詩

この当時、チョコレートが飲み物として存在していたことは前述の通りだが、男性が食後に飲んだり、洋酒を入れて楽しむ飲み物として、コーヒーと並んで飲まれていたことが明らかになった。これは、現在のチョコレートの位置づけとはかなり異なるものである。

## 5. おわりに

以上、文学テキストに現れる南蛮菓子と西洋菓子の代表例を通して、当時の菓子文化を検討してきたが、南蛮菓子が広く民衆に親しまれ浸透していた一方、西洋菓子は上流階級である一部の人々の食べ物といった認識が深く、しかもその種類によって捉え方に格差もみられた。具体的には、アイスクリームは女性や子供に親しまれ、チョコレート



は専ら男性が楽しむ物であることが文学テキストの叙述から明らかになった。このように文学テキストにおける菓子文化を観察することで、当時の菓子文化のみならず作品の中での菓子の位置づけや作者の隠れた意図を考えることができた。食文化を直接的に探るのとは異なる今回の手法は、そういった意味で興味ある結果を認めることができたのではないかと思う。今後も、この文学テキストを通して文化を探ることで、新たな日本文化の特性を見出していきたいと考えている。

## 注

- (1) 柴田(1999)は、「食」をめぐる比喩表現について、欲望(つまみ食い)、経済的生活(食い詰める)、支配(人を食う)、処理(うまく料理する)、意識(やきもち)など極めて多岐に渡ることを指摘している。
- (2) 拙稿(2006)では、宮内(1982)における分類に基づき「カステラ」「こんべいとう」を和菓子、「チョコレート」「ビスケット」を洋菓子と提示したが、本稿ではそれぞれの菓子の由来に鑑み、これらをすべて渡来物と規定することにする。また、用例数の中で、チョコレートについては、詩の題名として用いられている場合を含むが、今回は本文に登場している用例のみを分析の対象とする。
- (3) 例えば、東京丸の内ではメゾンドショコラ、ドウバイヨル、銀座にはピエールマルコリーニ、ミッシェルショーダン、リシャール、デルレイ、ガレーなどのショコラティエが軒をつらね、人気を博している。
- (4) これは、文政10-12年、天保2-5年、嘉永1-2年の9年間のデータであり、特に天保以後が4例と、江戸末期に用例が激増している。
- (5) 以下、引用の記述については全て原典のままとする。また漢字の後の( )はルビである。
- (6) この他、京都帝国大学教授内田銀蔵によって書かれた『日本近世史』(明治36)の一部にも、用例がある。

或は云ふジェスイト僧の布教手段たる、米銀を給し、又は健達(コンタツ)(念珠)、眼鏡の類を与へ、若しくは葡萄酒及カステイラ、コムペイ等の乾菓を饗するして、人を誘ひしを以て、人々現在の恩恵に懐き、自(オ)から其の教に帰したるなりと。

(明治36年『日本近世史 第九節』内田銀蔵)

これはキリスト教伝来時の布教活動の様子を記した社会・経済の研究書であるため、一般的な文学としては認めることができないが、明治期の史論の一つの用例として参考としたい。

## 主要参考文献一覧

- 石川寛子編(1999)『地域と食文化』(財)放送大学教育振興会  
 石毛直道監修(1999)『講座食の文化 第三巻』(財)味の素食の文化センター  
 稲垣達郎編(1989)『明治文学全集』筑摩書房  
 江後迪子・吉川誠次(1997)「江戸末期の菓子普及状況(第2報)―馬琴日記にみえる菓子について―」『全集 日本の食文化第十巻 日常の食』雄山閣

- 柴田 武（1999）「言葉から見た食」石毛直道監修『講座食の文化 第一巻』（財）味の素食の文化センター
- 宮内 明（1982）『新編日本食品事典』医歯薬出版
- 村山なおこ（2001）『ケーキの世界』集英社
- 立川和美（2006）「近代テキストに見られる日本の菓子文化に関する小考（1）」『流通経済大学社会学部論叢』16（2）